

## ●ポストモダニズム② 1980年代の美術

■ アートメディアとしての写真の台頭

絵画や彫刻、デザインの美術教育を受けたアーティストが、写真をアートメディアとして使用する表現が台頭した。世界的な動向で写真芸術としてではなく、絵画と同じように、アートツールとして写真を用いている。



□ **アメリカ**：シンディ・シャーマン

ロバート・メイプルソープ

サンディ・スコグラント

シンディ・シャーマン 無題#94 1981

ウィリアム・ウェグマン／マイク&ダグ・スタン（スタン・ツインズ）

□ **イギリス**：ヘレン・チャドウィック

□ **ドイツ**：ベルント&ヒラ・ベッヒャー／ローター・バウムガルテン

□ **日本**：杉本博司

■ ニュースカルプチャー

80年代にイギリスで彫刻のニューウエーブが台頭した。今までにない造形言語でミニマルとも抽象彫刻とも違う、人々との距離を縮めるような親しみのある彫刻が作られた。プライマリー・ストラクチャーのアンソニー・カロ、フィリップ・キングを師として次世代の作家がニュースカルプチャーの動向を示した。



David Mach of the beaten Track 1988

□ **イギリス**：デヴィット・マック／リチャード・ディーコン／アニシュ・カプア

アントニー・ゴームリー／エドワード・アーリントン／トニー・クラッグ／バリー・フラナガン

ビル・ウッドロー

## ■ 80 年代の彫刻・立体・インスタレーション

単体の彫刻や絵画に飽き足らず、空間全体を支配するインスタレーションの手法を採用する作家が台頭。場の特性や歴史性、社会性を認識し空間を変容させる美術動向が多くなった。

□ **アメリカ**：ジュディ・シカゴ

レッド・グルームス／ジュディ・ファフ

デボラ・バタフィールド

ルイーズ・ブルジョワ

ナンシー・ドゥワイヤー

□ **ドイツ**：レベッカ・ホーン

ウルリッヒ・リュックリム／ボルフガング・ライプ

□ **フランス**：クリスチャン・ボルタンスキー

□ **ポーランド**：マクダレーナ・アバカノビッチ

□ **日本**：戸谷成雄／遠藤利克／深井隆／舟越桂／土屋公雄／川俣正



舟越桂と作品

---

## 上遠野 敏のお勧めアニメーション（スイス）

### 「ピングーの魚つり」／5 分

原作・アニメーション制作：オットマー・グッドマン（トリックフィルムスタジオ）制作年明記なし。1992 年に第一巻のビデオ発売。1 年ほどしてテレビ放映し爆発的人気となる。

第 1 巻には「僕はピングー」「ピングーの魚つり」「ピングーの卵のおもり」「ピングーのスキーレース」の 4 作品が収録され初期の傑作ぞろい。万国共通ピングー語の発想の良さやクレイアニメの面白さを存分に発揮。当時は新鮮な驚きであった。世界中の大人から子供までを魅了している。



解説：ピングーが魚つりに出掛けアザラシのロビと初のご対面。2 人（ひき）のやり取りから心温まる友情が芽生える。動きといい言葉（万国共通ピングー語）といい秀逸。初期の傑作中の傑作。

## #11 ポストモダニズム ニューペインティング 1970 年代末～ (新表現主義：ネオ・エクスプレッショニズム)

### ・皆さんの感想から

#### □ポストモダニズム：ニューペインティング

今日は色々な国の作家さんが出てきましたが、やはり作品にもお国柄というか、何か国ごとに共通した空気みたいな物がありますね。あたり前の事なのかもしれませんが、きっと「自分は唯一無二だ」と思っている人もいて、けど他人から見ると共通していて、そんな事もあるのかなと考えるととても興味深いです。まあ想像ではあるのですが**(国ごとの潜在意識や時代を反映させるようです。どこかしら共通の括りになるのが面白いところです)**／難解な物が少なく見やすかったです／国によって性格が現れていて、面白かったです。今回の作品は時代背景を知ると理解が深まる気がしました／アメリカ、ドイツ、イタリアと国によって作品の性格が違うのが見ていて面白かったです**(国によって作品の方向性も質も違いますね。80 年代に同時に現れた「絵画の復権」と言えるものなので同じくくりになっています。ここでは歴史や文化の特性が地域によって違う表現になることを理解しましょう)**。

#### □アメリカ

ストリート・グラフィティ好きです。ああいうちょっと崩れた可愛らしい絵が見るとなんだか楽しい気分になります／アメリカの作品は本当にアメリカらしいというか…ポップな感じがとても可愛いです／今日やったニューペインティングの中ではアメリカが POP よりで一番好きです／グラフィティが好きだった。あえて絵を平面で使うのが好きです。子どものようないたずら心が見えて面白いと思います。

■ジュリアン・シュナーベル：プレート・ペインティングを見て、発想力が凄いなと思いました。芸術家にしてみたら身近にある全てのものがアートに繋がるのだなと思いました／ジュリアン・シュナーベルのは色が好きでした／プレート・ペインティング良いですね。発想が斬新で荒々しく、何とも言えない魅力があります／シュナーベルの「海」は、陶器の破片、そして流木のような木を添えているのがコンセプチュアルの雰囲気を感じさせ、油絵で描いた絵が表現主義を感じさせるような作品だと思いました**(シュナーベルの作品のみならず、ニューペインティングを代表する傑作である事は間違いありません。彼の作品を見るとスケールの大きさと、今までにない新鮮なイメージの借用が、ある種の感動を呼びました。その後、映画監督としてジャン・ミッシェル・バスキアの映画などを製作しています)**／一目見ると乱雑に見えるが、全体をよく見てると、一つの世界として海を表現されていた。海は大きく身近な存在だけど、だからこそ分からないことがあるのかなと思った。



Julian Schnabel St. Francis in Ecstasy 1980

■ディヴィット・サーレ：ディヴィット・サーレさんも好きです。全体的にオレンジを使っている作家さんだなと思いました。そのオレンジから夕焼けとか哀愁を感じました／「KING KONG」と



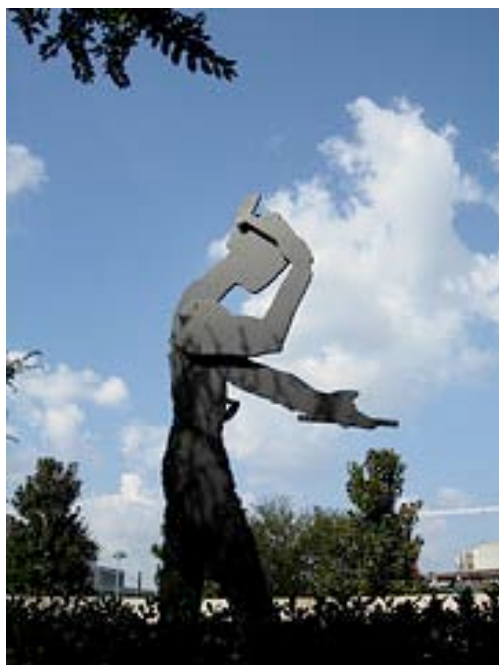
描いている作品が凄く良かった。色合いも好きだったし、青く描かれた人の顔が気になった。裸体を多く使っている作品が多いな—と思った／抽象と具象が 1 つの絵になるサーレの作品は新鮮な印象を受けた／女性が描かれているのが多かったですが、やはり女性の体という芸術に欠かせない要素の 1 つになったのでしょうか？（女性の体は昔から芸術のモチーフになっています。芸術に欠かせない要素ではありますが、近年は写真や他のメディアで女性の体を簡単に見ることが出来るので絵画にする意味の変更を余儀なくされていると思います）。

■ ロバート・ロンゴ：ディープキスの絵が好きでした。人間は本能と理性を兼ね備えている生き物で、私はそういう所が素敵で完成していない所が愛らしいというか、とても好きです。本能と理性で社会ができたのだと思います／社会の危機感がよく出ていた、レリーフや立体と絵の取り合わせが面白い。

■ エリック・フィッシュル：誰もいない所で興奮する少年の絵が良かったです。何となく男はよく分かる絵だな—と思いました／性描写の絵は思わず見てしまったが、かなりオープンな表現で日本だったら展示させてもらえないだろうな—と思いました（日本では展示出来ない作品もありますね。日本では、性器＝猥褻の概念が根強くあります。欧米の美術館では人間が有しているものに対してその尊厳を認めて展示している事が多いです）。



エリック・フィッシュル 悪童 1981 年



Jonathan Borofsky Hammering Man 1984-85

■ ジョナサン・ボロフスキー：ジョナサン・ボロフスキーの木の人型が好きでした。何か可愛い／センサーで動く作品は実際に動く所を見てみたいと思いました（靴屋さんがハンマーを振るうハンナリングマンは名古屋市立美術館のロビーで見ることが出来ます）／ジョナサン・ボロフスキーのハンマリング、人と比べてとても大きくて迫力があるな—と思いました。生で見たいです／カウンティングは、全てのものに「作品」という意味を持たせる行為ということですか？ミニマル的考え？（コンセプチュアルアートの考えですね。1 から無限大に数をカウンティングすることによって数の概念を超えた隠喩を作品で構築しようとしているのではないのでしょうか）／ベルリンの壁に描いた走る人の絵が良い。ガラス窓のルビーの作品は窓越しに（当時の）東ベルリンの状況を示す絵だと知り深いものを感じた。

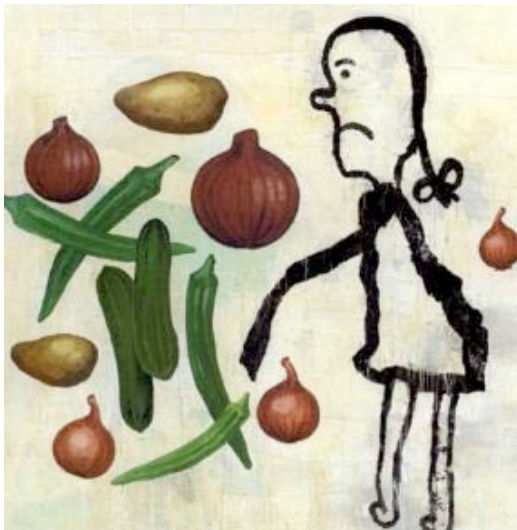
■ テリー・ウィンターズ：テリー・ウィンターズの絵は可愛いですね。日本の染め物で似た柄がありますね／胞子モチーフの絵は顕微鏡写真のようで美しいです。ミクロの世界を見chiefにした絵は珍しいのでしょうか。油絵は初めて見ました（画家は神の目、鳥の目、虫の目などミクロ・マクロを使い分けします。顕微鏡の世界をモチーフにした作品は多々ありますが、油絵にしたのは彼が初めてだと思います）。

■ **ロス・ブレックナー**：ロス・ブレックナーの絵、絵なのにキラキラ綺麗でした。見て、宇宙っぽい！と思いました／ロス・ブレックナーの絵も可愛い。ああいう絵、描きたいです／宇宙が凄く印象的でした。最初の方の星が無数にあるような作品です。あの絵の目の前に立ったら絶対吸い込まれそうな気がします。直接見てみたい／バードオブジャパンとか宇宙とか好きです。落ち着いた感じもするし、でもヤスリで削ったハードな部分もあって素敵でした／規則性があるせいか目がチカチカしました。じっとしていると吸い込まれていくような感覚になって1枚の絵がどんどん広がりを持っていく気がしました（**オブ・アートにイメージのアプロプリエーション**を行い抽象画と具象が絶妙に配置されています。宇宙を思わせるイメージと知覚に訴える光が相乗した効果が表れていますね。深い精神性を感じます）。



Ross Bleckner Oceans 1984

■ **ドナルド・パチュラー**：ジャガイモと人間の絵はぜひTシャツにしたいです／ドナルド・パチュラーは可愛い感じの絵でしたね。ほっこりした気持ちになれるなあと思いました／ドナルド・パチュラーのトイレの落書き参照するという所がいいなーと思いました／ドナルド・パチュラーの軽く描いた感じの絵が可愛かったです。



Donald Baechler Santa Clara Flat, 1987-88

／ドナルド・パチュラーは可愛かった。色合いも素朴でなごみました／ドナルド・パチュラーの絵が可愛くて好きです（右の写真はパチュラーの彫刻です。彫刻もゆるゆるの可愛さです）



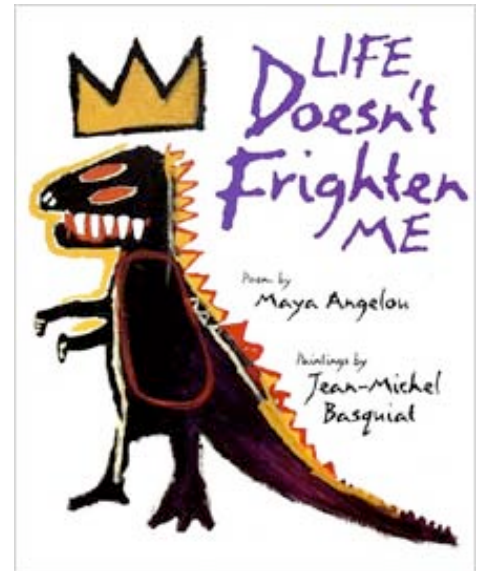
／上手な絵も素晴らしいですが、私は緩い絵の方が好きです。そこまで絵心がない人が描く絵ほど、私はアートを感じます／作品可愛いです。飛行機の作品の色が綺麗で可愛かったです。抽象との取り合わせが抜群の構成力です。

■ **キース・ヘリング**：キース・ヘリングはユニクロのTシャツでも有名なので知っていました。彼の色の使い方が好きです／キース・ヘリングのイラストがポップで好きです。くっきりはっきりしたイラストって可愛い／キース・ヘリングのような絵は、額縁に入れて眺めるよりも、Tシャツや大きな壁に貼りたいと思う作品だった。

■ **ジャン・ミッシェル・バスキア**：シュガー・レイ・ロビンソンの黒い背景の絵がなんでアートと呼ばれるのか分かりませんでした／バスキアの作品に「クールの誕生」と書いてあったのが面白かった／ポストモダニズムは国によって本当に雰囲気違って面白かったです。アメリカの所で、ジャン・ミッシェル・バスキアの作品で日本語が書かれていたのは気のせいでしょうか？左上に逆さまに書いてあった気がしたので詳しく教えてください（「クールの誕生」です。その辺にあった日本の雑誌のページにあった単語をひょいと絵にはめ込んだのです。意味はありません）／ジャン・ミッシェル・バスキアの絵はドラックをやっていた人と聞いて納得しました。正直あまり良さは分か



りません…／明らかにドラッグやっているなーっていう絵でしたがとても好きな作風でした。今日紹介された中でアメリカのアーティストの中で一番気に入りました（ドラッグ中毒で、27歳で亡くなっています。ジャン・ミッシェル・バスキアは黒人初のメジャーアーティストです。何故かアートの世界では世界的に評価される黒人アーティストがいなかったのです）／バスキアの絵が面白いです。薬中と言っていました但作品を作っているときは普通に真剣に描いているのが気になります（心に葛藤があったのでしょうか。27歳の短い人生ですが、人の5倍仕事をして亡くなったと思います）／ジャン・ミッシェルの絵がぱっと見て凄く好きだと思いました。少しいっちゃてる人の方が面白い。今までにない作品を作っているものですが、本当に（薬で）いっちゃったとか…。何かワイルドです。 「Life Doesn't Frighten Me」 Maya Angelou (詩), Jean Michel Basquiat (絵)



■ケニー・シャーフ：ケニー・シャーフの作品はポップで可愛い、でも不思議な感じでした／ケニー・シャーフのキャラクターがカラフルでグミみたいでちょっと気持ち悪くて可愛かったです。全部、色！色！って感じが好きです！／黒猫のフィリックス懐かしいなと思いました。10円ガムに描かれていたのを思い出しました／まさしくアメリカンコミックから抜け出したような絵で面白いです。

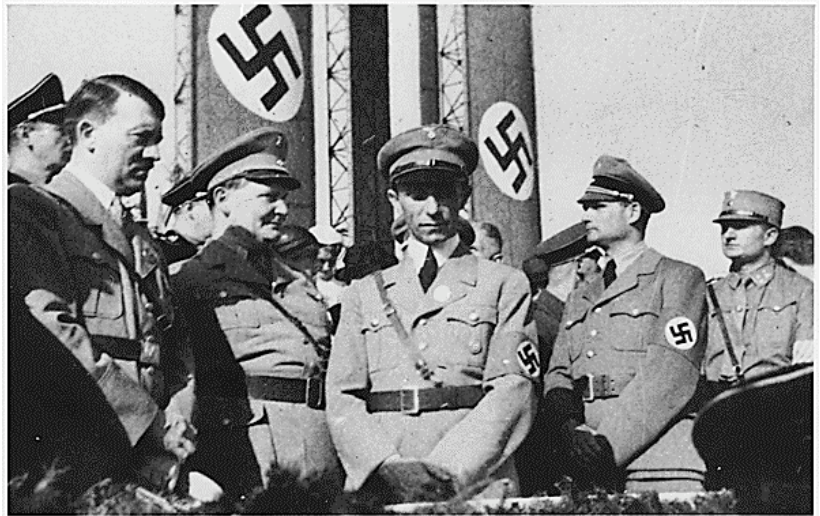
Kenny Scharf Juicy Jungle 1983-1984

■マーク・コスタビ：フェルメールが大好きなので幾何学的に変えられているのはびっくりでした。それでもどの画家が分かるのだから凄い（フェルメールも幾何学抽象のモンドリアンもオランダ繋がりですね）。

## □ドイツ

ドイツでは暗い現実が表現されていて、気が滅入りそうでした。でもそのような作家がいるからこそ写真以上に伝わってくるものがあるので、こうして受け継いで若い世代も見て学ぶべきだと思いました。ナチスの事は忘れてはいけない歴史です（ドイツは過去の歴史の負の遺産をしっかりと検証して、清算しようとしていますね）／ドイツのポストモダニズムアートが凄かったです。見ていて胃が痛くなるのにずっと見ていたくなる。作品に魅力が詰まっているからそうなるのだと思いました／今日はドイツのアーティストがとても好きでした。ジグマー・ボルケの作品とても可愛かったです。A・R・ペングの棒人間みたいな絵、何か凄く怖かった。他に絵をバーナーであぶっちゃう人がいるなんてびっくりです。けどカッコよかった。全体的にはハッキリと描かれていないぼわ～とした絵が好きだなあと感じました／ドイツの作品は他の国よりも固い印象を受けました。歴史がそうさせるのかお国柄なのか、どちらもあるのだらうなと思います（慎重深く正直なアートは、作品が人間としての真の姿を映す鏡になっていまいね。見る方も自分の良心を照らされると思います）／ドイツの絵画は色合いも少なく暗い感じなものが多かったですが、深みがありました（精神的な深みがあり内容が濃いですね）／全体的にドイツの作品が好きです。

■ アンゼルム・キーファー：アンゼルム・キーファーの作品はどれも焼けただれて見えたり、実際焼いてあったり、ヒトラーのした事を心の底から嫌悪しているように見えました（**焼けこげが戦争の悲惨さをあぶり出していますね**）／ユダヤの少女の服の作品はとても胸が締め付けられました。ああいう物を直に見ることで歴史の実感というのがわくののだろーと思いました／アンゼルム・キーファーのドイツナチに連れ去られた女の子が切なく寂しいですね／アンゼルム・キーファーの作品はリアルすぎてとても怖かったです／オランダの銀行が焼き尽くされている絵画（キーファーの）は痛々しくて重かったです。ヒトラーがいた時代、ドイツの芸術家たちはかなり影響を受けたんだと思いました。強い権力を持って支配しようとする人物が現れるとどの分野の文化にも影響を残すのだと感じました（ヒトラーはシュルレアリスムやダダをはじめ当時の前衛芸術を退廃芸術として迫害しました。現在の人々の心にも大きな影響を与えています。2001年のドイツ・ハンブルク文化庁主催の展覧会に上遠野が出品した時に、同時に市内で日本人の若手作家の展覧会も開催されました。若手作家の一人がギャラリーの壁に直接仏教の「卍」を描いて、それを作品にしました。ヒンドゥー教や仏教で用いられる吉祥の印です。ナチの象徴のハーケンクロイツ：鉤十字は卍を裏返して角度を変えたマークです。その作品のギャラリーにサッカー帰りの暴徒が乱入して卍の壁にビール瓶を投げつける事件が発生しました。ナチに対するアレルギーは私たちの想像以上なものがあります。現在ヨーロッパでは、ナチの象徴のハーケンクロイツ：鉤十字を使用出来なくする法律が出来つつあります）。



バーナーであぶった絵は、見るだけで焦げ臭いにおいまでして来そうでした。実物を見たらきっと表面の凹凸などから見ていて触覚にも訴えかけてきそうだと思いました。五感で感じられる絵という印象を受けました（**絵画をバーナーで焼く事でリアリティをより引き出していますね。内容の質、精神性、画面の大きさ、物質の声、いずれも他を圧倒する迫力の絵画です**）／ドイツとアメリカの作品では空気感が全然違いましたね。オランダの銀行は焼ける事の生々しさ、ヒトラーの部屋の重々しい雰囲気伝わってきました。迫害や分裂を経て、自由に表現できるようになってから芸術家たちが何を未来に残そうと、伝えようとしていたのかを感じる事ができた気がしました（**キーファーは骨太の作家ですね。人類の愛憎一手に背負って、美醜を超えた作品を作っています。それを感じることが出来るあなたも可能性があります**）。



Anselm Kiefer Athanor 1981~82

キーファーの作品が凄いと思いました。ドイツにおけるタブーとも言える、ヒトラーやナチスを

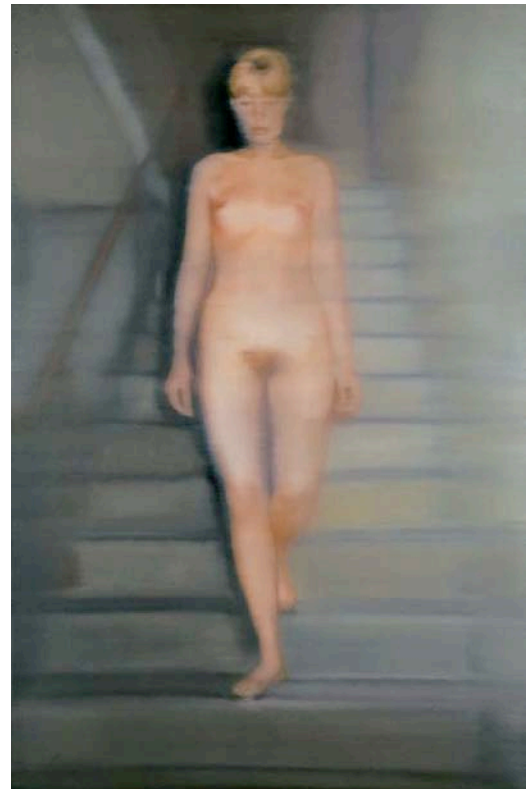


まっすぐ力強く、ある種狂氣的に描いているのが心にざくっと突き刺さってくる感じがしました。怒りや悲しみや皮肉が良く伝わる良い作品ばかりな気がします**（人類の良心をキーファーには感じますね）**／キーファーの作品重いです。バーナーで焼くっていうのが直接的で、ほんとに血とか染みてそんな雰囲気になっていて怖かったです**（国が焦土になるには、加害者としてのドイツ。そして被害者にもなるドイツを現していますね）**／何故かとても惹かれました、彼の作品には。描かれた作品には、彼の痛みが込められている気がします。それが平面を通して伝わってくるから、なんだか目を離せません／アンゼルム・キーファーの作品はシリアスで重く、ぐっと来ました。アメリカのニューペインティングとは全然違いますね／キーファーの作品に味があって深いなと思いました。作品名は分かりませんが、部屋の両側の壁に炎が灯っている絵が好きです。木目まで描かれているけどドロイーイングらしくざっくりした雰囲気もあって、丁寧に細かく描かれているより魅力的だと思います**（タイトルは「Germany's Spiritual Heroes」です。室内の木目も鮮やかな表現ですが、押し付けがましくない呼吸の良い絵画でした。炎はドイツの精神的な支柱と言われる偉人を現しています）**。



Anselm Kiefer, Spiritual Heroes of Germany, 1973.

■**ゲルハルト・リヒター**：ドイツの作家も良かったです。リヒターの作品は、ぼやけてはっきり見えない感じのちょっともどかしいけど、そこが色々な想像を膨らませられる楽しみにもなります／写真をぼかして描いてある作品好きでした。どんな表情してるのか想像がかきたてられます／ニューペインティングではドイツのゲルハルト・リヒターが印象に残った。色々な事をやっていたが、ピンボケしたエマ（？）の絵が何とも言えない魅力があった。何とも言えないけどいい／ぼかしって解釈の余地が残されていて良いですね！／絶妙なぼけの絵が凄かった。絵っていうのも凄い。ほんとに絶妙にぼけている所が見てる人に色々思わせたり考えさせたり感じさせたりできるんだなと／ニューペインティングは国が違う事で作風が違って面白かったです。私が特に印象に残ったのはドイツのゲルハルト・リヒターでした。あえてぼかした絵がとても素敵でした。写真も全てが綺麗に写ったものな訳ではなく、ぼけた写真にも味があるように絵にもそのような所があるなと感じました。私はフォトリアリズムより好きだなと思いました。しかし、このようなぼやけた感じを表現できるのも、先生がフォトリアリズムを越えていると言っていた奥さんを描いた絵を描ける技術があるからこそなんだなあと思います**（個人的には、スーパーリアリズムの方々の写真の様に描いた絵より、リヒターのぼかした絵の方が脳内リアリティのイメージが5倍増しに膨らみます。それもこれも確かな技術と信念があるからです）**。



Gerhard Richter, Ema-Akt auf einer Treppe, Ema (Nude on a Staircase), 1966,

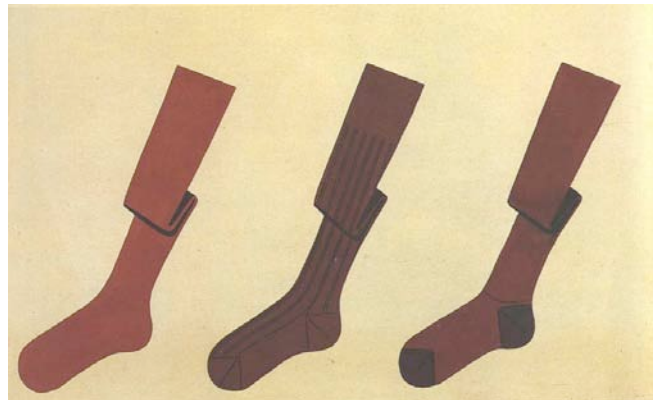


ゲルハルト・リヒター作品、私もうすぼんやり感がたまらなく好きでした。パンチラの原理と同じですね！（おもしろい発想ですね。「思考の余地」や「想像の余地」がある作品は楽しいですね。人は物事が分った瞬間から急速に興味を失うようにできています。男女の関係も同じ様なものです。良い作品を沢山見て心も思考力も想像力も涵養させて豊かな人生にしてください）／作家さんの中ではゲルハルト・リヒターさんが好きです。ぼけてる感じが良いです。人物画も良いけど、ろうそくの絵が一番好きです。ろうそくが灯ってる淡い光や感じがよく表現されていると思いました／ぼかした作品がありましたが、確かにフォトリアリズムよりこの作品の方がよりイメージーションが広がるなと思いました／わざとぼかして絵を描けるなんて凄いテクニックだなと思います。・ろうそくで描かれた絵に驚きました／ゲハルト・リヒターの絵は上手過ぎると思った。カメラのピンボケみたいに写真みたいだった。ぼけてるとどうしてぼけてるんだとを考えてしまうなと思った。どうしてあんな絵が描けるのかと羨ましいと思った。淡く深い感じがした。ろうそくや色鉛筆で描いた絵を見て、何で描いても凄い絵になるんだと感じた自分も、新ジャンルを生み出そうと思った。自然を大切に／フォトリアリズムというか、リヒターの絵は「絵だよ」と説明してもらわないと、本当に写真と間違ってしまうようで、それをぼかしてイメージさせる「余地」をあえて作るというのは凄い技術だなと思った（ぼかしてイメージさせる「余地」をあえて作ることで、60年代から現在までゲルハルト・リヒターは常にアートワールドのトップランナーとして活躍しているのがタフな作家なのです）。



Gerhard Richter, Zwei Kerzen 1982

■ ジグマー・ポルケ：ドイツの作品は戦争の生々しさが伝わってくるものが多くて、暗くて重い印象を受けました。ジグマー・ポルケの靴下がとても可愛いなと思いました。東ドイツの困窮が裏側にあると聴くと切なくなりました（人の運命は自分ではどうにもならないシステムの中に組み込まれています。食うに困らない生活が当たり前の日本では考えられないことです）。



Sigmar Polke Socks 1963

シルクの裏から絵を描くという発想が凄いと思いました（透明のプラスチックで塗布されています。透けて見える支持体に描かれた絵はマルチレイヤー構造の絵画と呼ばれています。シルク面の



表面、裏面両面から描かれています。下の左の作品を見れば理解できると思います。木枠が透けて見えます）／ニューペインティングではジグマーポルケがお気に入りです。白い背景に日常的な物を描くのは凄く可愛い。と思いました。彼の他の作品はまた印象が違って好きです／ドイツの人のバケツや靴下の絵が凄く好きでした。素朴で可愛らしいです。

Sigmar Polke Primavera, 2003

■A・R・ペンク：A・R・ベングの「革命」という作品で、右側に人の絵（写真？）を担いでいるような描写がありますよね。私にはあれが遺影のように見えます。革命のためにその命を犠牲にする様を描いた作品のように見え、恐怖を覚えました。ドイツに遺影という文化があるかは分からないのですが、あれは何だったのでしょうか（**革命の犠牲者の柩と遺影ですかね**）／吊り橋のような絵、考えさせられました。心もとない吊り橋に、さらに足元に火がつき、空も暗くて、そんな恐ろしい道を通してでも西にという想いがあったのですね。どれだけ旧東ドイツが酷な状況にあったのか（当時の東ドイツの体制では、彼の絵は反体制的な絵画だったので、当然、表現が統制されます。西側の熱烈な支持者が秘密裏に運び出し西ドイツで展覧会を行ったのです。本人は勿論、自分の展覧会を見ることもできなかったのです。表現の自由を保証されている私たちは何を思うべきなのでしょう）。



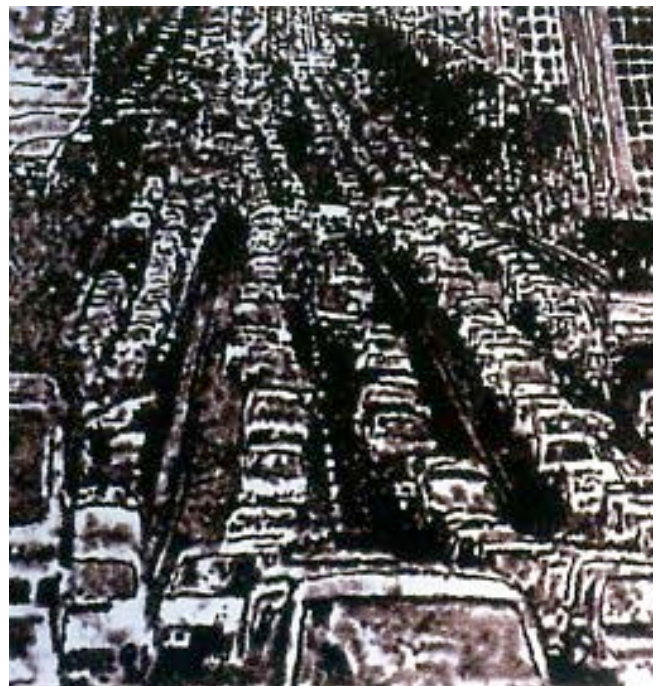
A・R・ペンク 革命 1965



A・R・ペンク 通過 1963

■ゲオルグ・バセリッツ：／逆さまで哀しい絵が多いが色使いが綺麗／荒々しい木彫は人間の真の姿を現している様で新鮮な彫刻に見えました。

■ジリ・ゲオルグ・ドクピル：ススで絵を描いていたのには驚きました！木炭とかではないのですね。絵を描くために鉛筆や紙が特別必要ではないのだと改めて感じました（**ろうそくに油を付けてすすを発生させていました。天井を向いてすすで描くテクは驚きですね**）／ドクピルのろうそくで描いた絵も、細かすぎてびっくりしました。絵の具じゃないのか…全体的にドイツのニューペインティングが好きでした／ジリ・ゲオルグ・ドクピルのすすで描いた絵も凄かったです。どんな素材もアートになれるんだなと思いました／ジリ・ゲオルグ・ドクピルの絵は全然ろうそくで描いたように見えませんでした。凄いです。描こうと思えば、絵を描く画材なんて何でもありなのですね／ジリ・ゲオルグ・ドクピルさんの全てのろうそくのすすで描いたというのに衝撃を受けました！／作品がすすで描かれているという事に凄くびっくりしました／ドイツの作家達が好きでした。すすで絵を描いているの凄い！描くもの、描ける場所があればどこにでも描ける！／たとえ絵の具がなくても、絵は描けますが、すすであそこまで描くのが来世にまかせます（**自分の武器を磨いてくださいね**）／ろうで描かれているというのに感動しました。あんな細かく描けるなんてアートの可能性は無限大ですね！／すすで描いた作品いいですね。ろうそくにそういう使い方ができるとは。



Jiri Georg Dokoupil Trafic II 1989



## □イタリア

イタリアの絵は明るいというのはまさにイタリア人の人柄を表していて面白いなと思いました／トランスアバンギャルディアの3人の色彩が凄かったです（3C=クッキ、キア、クレメンテをはじめイタリア人の色感は凄いですね）／イタリアの作家の絵は、アニメーションにして動かしても面白そうな色合いや構図が多かったように思います／それぞれ国が違くと、やっぱり作風も全然違うんですね。当たり前の気もしますが、改めて文化の違いとか社会的背景とか興味深いです。

■エンツォ・クッキ：エンツォ・クッキの絵は色使いが繊細かつ大胆でとても素敵でした。奥行きや深さを感じました。

■サンドロ・キア：おならをしている絵は面白いです。あんまり良いイメージではないはずなのに、あまりにも爽やかで思い切りが良くて。むしろ、始めからマイナスイメージがないのか？本当におならなのか？（他の絵画も同じようなモノが描かれているのがあります。作家はそれも含めて人間像を表現したのでしょうか）。

■フランチェスコ・クレメンテ：クレメンテの自画像いいですね。歯に写っているのは何でしょう？（歯はどくろになっていました）／クレメンテの絵はくだらないけどくすりと笑えていいなと思いました／「二人の画家」：背景はとても繊細で綺麗なのに、前景の男性二人は輪郭がはっきりして描き方が違う、そして、お互いの鼻のアナに指を入れているのでギャップに引かれました。テープで紙を張り合わせているのも気楽な感じが出て、良いと思います。左半分と右半分で描いた人が違うのでしょうか？（鼻に指の感覚は好きです。左側 1/3 は作画のテイストが違うので付け替えした物でしょう。西洋と東洋を行き来している自画像と言えるモノです。よく見ていましたね）／クレメンテさんの地球の絵で、少年の首の曲がり方がつぼでした。



フランチェスコ・クレメンテ 二人の画家 1980

■ミンモ・パラディーノ：ミンモ・パラディーノの作品の雰囲気が良いと思った／抽象的だが、絵から飛び出るくらいの迫力を感じた。もうちょっと近くで見たいです。

■サイ・トウォンブリー（アメリカ）：サイ・トウォンブリーの落書きのような絵も何か動きを感じさせるものがあった／芸術と落書きと紙一重で、それが評価されるというのは、もちろんタイミングもあるからでしょうけど、なんだかんだ言ってみんな落書きが嫌いじゃないからなんじゃないかと思えてきました（それを支える芸術文化の成熟さが欧米にはあるということです。実際に作品を見るとその素晴らしさに圧倒されます、ぜひ実物をご覧下さい）／真っ白な立体作品は素敵ですね。作品から無音が聴こえる気がする／白い立体物は綺麗でした。何にでも染められてしまいそうな「白」が形を成して自ら主張している姿は凄く綺麗だと思います。



サイ・トウォンブリー Untitled 1961

## ■ 日本

最後の日本人作家の作品の中に目に留まる物がたくさんあったので、素早く終わってしまったのが残念でした（ごめんなさいね。限られた時間なので。興味のある作家は調べてみて、さらに好きになってくださいね）／日本の作家がざーっと流れていったのがもったいなかった／授業受ける事で自分の好きな芸術が分かってきたような気がします。抽象が好きなので、今日の授業は日本の作家が面白そうだなと思いました。

■有元利夫：中世の絵画のようでした。女の人が可愛らしい（有元さんはイタリア初期ルネッサンスの画家、ピエロ・デラ・フランチェスカが大好きで作品を参照しています）。

有元利夫 花降る日 1977年



■堀浩哉：感想なし。■辰野登恵子：感想なし。

■根岸芳郎：根岸さんの絵のぼやとした感じがとても好きです／根岸芳郎さんのもわーっとした抽象画も好きです。色が素敵でした。

■松本陽子：松本陽子は女性らしい柔らかいものを描くなと思った。布で拭いたり、消して描いての作品が多いですね（吉沢美香さんもそうですし、小林正人さんもそうですね。消したり描いたりをくる返すうちに行為が厚みとなって、多重な情感や空気感が描かれるのだろうと思います）／松本陽子さんの作品が凄く楽しかったです／煙みたいで水の中にミルクを注いだみたいで、もやっとした作品に見えました。ぼやっとして頭の中もぼやっとしましたが、はっきりと細かい線の動きもとらえることもできます。思わず触ってみたいくなりました。おそらく触ると柔らかい絵なのだと思います（なるほど柔らかい絵ですね）。

松本陽子 《光は荒野のなかに拡散している監》 1993年



■関口敦仁：ペインティング、立体と平面が合わさって新鮮な感じでした。

■近藤克義：感想なし。

■吉本作次：吉本さんの作品が可愛いなと思いました。

■小林正人：海外の作品ももちろん凄いなと思いました、日本の方の作品も凄いなと思いました。とても抽象的で独特な作品が多いと感じたんですが、先生の同級生とおっしゃっていた小林さんの作品へかけた時間に驚きました（3ヶ月です。木炭で1本の線を引き、それをガーゼで拭き取ります。その積み重ねが時間の厚みと表現の厚みとなっています。描く事の意味を問い直されますね）／小林正人さんの画面の雰囲気が好きでした。シンプルだからといって簡単に描けるわけではないんですよね（誰でも作品でおしゃべりしたいのです。饒舌には出来ませんが、寡黙で深く表現するのは難しいことなのです）／小林正人の絵が気になりました。彼の作品のテーマはなにだったですか？（何気ない日常に横たわっているもの、ことをある種の異次元の高見に持ってくる表現なのだと思います）／3ヶ月かけてあの絵を描いたことに驚きました。シンプルな作品ですが、線の一本一本全てにこだわりが刻まれているのですね。



小林正人 天使=絵画 1984



■吉沢美香：日本にも色々なタイプなアーティストがいるのだなーと思いました。吉沢美香さんの作品が綺麗でした／アクリル板に絵具で描いたり拭き取ったりして絵が出来る発想が面白いです。

■大竹伸朗：写真にコラージュした物があつたが、絵の具を塗るっていう事は写真の素材は光沢紙ではなく、画用紙みたいな物を使っているのだろうか。しかし、画用紙みたいな紙にうまく写真は印刷できないのではないのだろうか。とにかく興味が沸きやってみたくと思った（これは大竹さんの作品ですか？キーファ어의作品でしょうか？今度から頭に作家名をお願いします。大竹さんの作品で説明します。写真にも絵具が乗ります。カラーインクやアクリル絵具、



大竹伸朗 別海 2000年



大竹伸朗 室蘭 1996

油彩、コラージュなどを施し上から透明樹脂をかけて作品にしています）／大竹伸朗も「フランク・フィルム」もコラージュのアングラっぽい感じが面白いです。コラージュ作家の構成力って凄い／日本の景色をイラスト風にした物が好きです。写実的に描けば何でも伝えられますが、デフォルメされた絵だけで人に情報を伝えることも技術なのだと思います／大竹さんの室蘭のおもちゃ屋さんの絵の色が可愛かったです。別海はおばあちゃんの家が近いので、親近感わきました。草原に1本道、別海の風景そのものです（室蘭のおもちゃ屋さんの看板を逆さまにして作品にしました。日本景シリーズです。別海の風景画シンプルですけどインパクトあります。大竹さんはムサビ1年の時、2週間で休学して別海のウルリー牧場の渡辺さんの所で無休、無給で働いていました）／今回のポストモダニズムは国になって表現がかなり違って面白かったです。大竹伸朗さんの作品が一番好きだなと思いました／大竹伸朗、今朝聴いて楽しみにしていました／グラフィティには昔から興味があり、授業で紹介されたアーティストのストリートで描いた作品も、もっと見てみたいです／色鉛筆の本気を見た気がしました／自動演奏装置がとても格好良かった（大竹伸朗さんのデビュー当時は「19」というバンドを作って活動していました。ダブ平&ニューチャネルのライブはボアダムスの山塚アイ（ヤマンタカアイ）とのユニットです。山塚アイさんはノイズ系のハードコアバンドで人気です。大竹伸朗さんが対面する別ブースで遠隔自動演奏しています。ユニット名は「パズルパックス」です）。

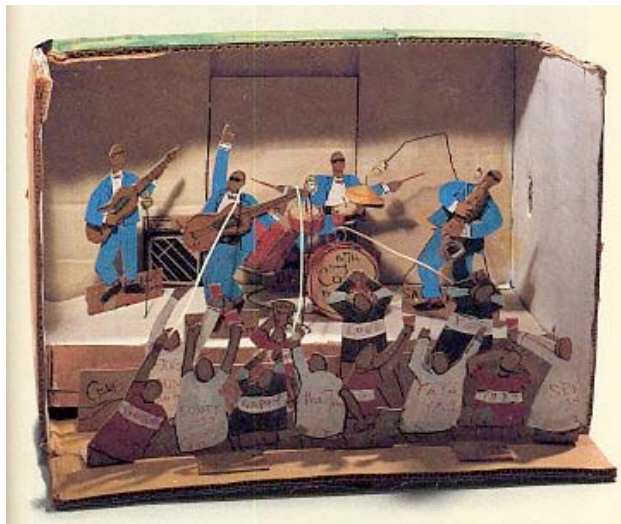


ダブ平&ニューチャネル

山塚アイと大竹伸朗パズルパックスのライブ



■日比野克彦：日比野さんの作品が可愛らしくてとても印象的でした／アートボックスの参考になるものもあって良かったです。どんな物を作るから楽しみです／日本だと特に日比野さんのボックスアート、ジャケットが素材だけど手が込んでいて可愛らしいなと思いました（「呼吸の取り方が上手い」作家さんですね。工作小僧：日比野克彦の面目躍如がボール紙アートですね）／最後の立体作品（ペーパークラフト）紙でグローブなどの形にすると、質感の違いで新しいものに見える。スカジャンは腕の形が残っているようだ／最後に見せてくれた BOXART も可愛かったです。私も素敵は BOX 作ってポストカードにしたいです／日比野克彦のボックスアートは可愛らしかった。欲しい。価値を生み出すのも芸術家の仕事ですね／日比野克彦さんのボックスアート凄く欲しくなりました。私も作りたいと思いました（東京芸大のゴミ捨て場には生協で捨てた段ボールや箱がたくさんあり、拾ったもので作られています。アートは紙 1 枚、鉛筆 1 本あれば、崇高な作品が出来ますね。キャンバス全面に金やダイヤを貼付けても価値が出るとも限りません。ボール紙でも創造性をどのように発揮させるかのお手本ですね）／アートボックス（ボックスアート）も素敵でした／日比野克彦さんの箱のアートがとても素敵でした／日比野克彦可愛い。



日比野克彦 YEH! YEH! YEH! 1983

## □授業全般

サイ・トウオンブリーやエンツォ・クッキよりも日本の方が色味が鮮やかだと思いました。欧州のニューペインティング怖いです。はさみとかあれ明らかに殺傷能力が高そうです。巨人とか足の赤いのは血にしかみえません。超怖いです。日産の CM の人だってニョロニョロで気持ち悪い＆恐怖です。もう無理／国によって違いがあって面白かったです。時代的に戦争関係の絵が多かった。ぱっと見キャラクター的な絵なのによく見ると内容は戦争みたいのがどの国にもある気がした／先生の T シャツ別海ですね！！

（大竹伸朗さんの原点である別海です）／先生の T シャツ、授業の初めはなんて描いてあるのか分かりませんでした。別海！（大竹さんは新潮社の文芸誌「新潮」のロゴデザインもしています。白抜きの文字デザインは秀逸です）。



## □課題について

課題についてなのですが、写真の引用元も記入した方がいいですか？（写真は引用先はいりません。作家名／作品タイトル／制作年を記してください）。

### ・皆さんの質問から

### ・ニューペインティング：アメリカ

Q. ジュリアン・シュナーベルの作品が最初が 100 万、200 万、後に 1 億 2 億になると聞いて作品の価値、値段というものはどのように決められるのか気になった。

女性のアートデラー「メアリー・ブーン」と世界のアートの動向を決定する力のあるアートデ



ーラーの「レオ・キャストリ」は共同で、ジュリアン・シュナーベルを戦略的に売り出したのです。プレート・ペインティングはマスコミにも大きく取り上げられ。アート界にも新鮮なショックを与えました。評判が評判を呼び一躍時代の寵児になったのです。コレクターが欲しがり個展を開く度に値段が高騰したのです。それは「シュナーベル・エフェクト」と呼ばれました。評判の作家の個展はオープン前にコレクターやマスコミなどを招待し、内覧会で即日完売することが多いのです。現在ではシュナーベルは作られた神話と言われています。しかしながら彼の絵によってニューペインティングがはじまり、ポストモダンの扉も開いたのです。



ジュリアン・シュナーベル 「剣を持つ青いヌード」 1979/80 年

**Q. ジョナサン・ボロフスキーのゴミとか卓球台とかの作品「全ての物が作品」と言っていました、その中に作者はどんな意味を込めているのでしょうか？**

ジョナサン・ボロフスキーの作品には全て、ナンバーが振られていてカウンティングするというコンセプチュアルな表現の側面もあります。会場にあるゴミくずを含め、作品数は現在 3 百万を超えていると思います。この写真は NY のポーラ・クパー・ギャラリーの展示風景ですが、全ての作品の構成を考えて、絶妙に配置してあると思います。ですから、卓球をする人も作品の一部として取り込まれ重要な要素となります。アトリエをそのまま展覧会場に持ってきたら一番面白いと良く言われます。まさしくボロフスキーはそれを行ったのでしょう。一人の作家にも多重な考えと表現があります。一見意味脈絡なく感じる展示ですが、彼の中では全て思考の糸が繋がっていると思います。



ジョナサン・ボロフスキーの展覧会風景

**Q. ロス・ブレックナーの宇宙空間のような絵は、どんな画材でどのように描いたのですか？**

油絵具で描いています。色を何層にも塗り重ね、サンドペーパーをつけたサンダーなどで擦りだして下の色を出しています。なかなか神秘的な絵でしたね。ロス・ブレックナーの絵画は精神性の高いオリジナリティーを感じます。良質な画家として評価されています。

ロス・ブレックナー More Wreath 1986



**Q. グラフィックアートから表に引っ張り出された際に落書きした違法行為は問題にならなかったのかどうか？昔は規制も緩かったのかな。今、同じようなことをする人がいてもアーティストとして認められるのか少し疑問。**

今も昔も違法行為ですから、現場を押さえられたら捕まりますね。奈良美智さんがニューヨークで捕まった事件がありました。路上でグラフィックアートを違法に行う人は現在でもいっぱいいます。でも、キース・ヘリングやジャン・ミッシェル・バスキアのようにオリジナリティー溢れる作

品は、あまりお目にかかった事がありません、スタイルの模倣が多いように思えます。現代で、もしそのような素晴らしい絵を描く人がいたら作家として表に出るでしょう。しかし 80 年代のようなニューペインティングが席巻している時代と違って、熱狂的には受け入れられ評価されるかは分かりません。

Jean-Michel Basquiat Untitled



### ・ニューペインティング：ドイツ

**Q. アンゼルム・キーファーの鉛と塩を使用することにはどんな意味があるのでしょうか？**

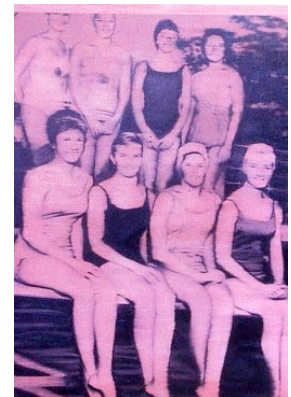
アンゼルム・キーファーは主題と意味を復権させた画家と言われています。砂、土、藁、ドライフラワー、写真、鉛、塩など絵の具と併せて物質を素材として使っています。物質の中にある「言葉」や「精神」の言葉を絵画の中で語らせようとしています。鉛とは金をつくるための原初の物質で錬金術のイメージに惹かれると言っています。金属でありながら可塑性もある柔らかさや放射能も通さないシェルターなどの特性が彼の創造にフィットする素材なのではないでしょう。塩は生命の根源、神聖なもの、清め、塩漬けにすることによる、時間や生体そのもののフリーズなど。彼は物質によって創造と思考の旅をしているのだと思います。彼の作品の前例としてボイスやアルテポーベラの「もの」の言葉の参照と抽象表現主義の系譜に主題と意味を復活させたのです。



Anselm Kiefer Shebirat Ha Kelim, 1990

**Q. ゲルハルト・リヒターは何を表現していこうとしているのでしょうか？**

ポップアート時代から現在まで、常にトップランナーとして現代美術のなかで活躍するスーパースターの1人がゲルハルト・リヒターです。写真を元にしたピンぼけの絵画は人々にイメージを強く喚起させ増幅、振幅を促します。題材は日常や政治など、ある種のルポルタージュ絵画と言えるもので、時代の表現者とも言えるでしょう。本物を見ると見事な絵画力で感動します。授業では紹介出来ませんでした。カラーチャートの作品やガラスを積層にして映り込ませる作品、スキージでストロークを付けた抽象絵画など幅広いバリエーションがあります。



Gerhart Richter The Swimmers 1965

### ・共通に関する質問

**Q.ニューペインティング＝自由に絵を描くということなら、むしろ何故ミニマルアートやコンセプチュアルアートは規制というか禁欲的に描いたり作ったりしたのでしょうか？**

時代の反映です。60 年代中頃から 70 年代のミニマルアートやコンセプチュアルアートは抽象表現の極北を目指した表現なのです。ポップアートと、たもとを分けた表現と言えます。80 年代近くなってくると、表現のドンづまりから解放されたい若い作家たちが、純粋な欲求によって絵を描きたいと思うのは必然性があると思います。ミニマルアートは究極な形態なので、後から作る作家は模倣や追従と見られてしまうのです。振り子が大きく揺り戻された表現がニューペインティングなのです。しかしこの熱狂も 10 年程で終息してしまいました。猫も杓子もニューペインティングの絵画でしたので受容者が飽きてきたのでしょう。ポスト・モダニズムの時代から、アートはサバイバルの様相を呈してきました。若くしてトップアーティストとして成功しなければならない風潮が出来たのです。その後、消費され時代に潰されていった作家が大勢出たのです。



**Q.国によって作風が変わるのは見ていて楽しいです。**

国によって固有のアイデンティティがあります。歴史性、民族性から醸成される考え方、表現の仕方も当然違いが発生します。個々のナショナリズムの尊重があってこそグローバル化があるといえます。ただ受け手側には当然、ステレオタイプのイメージが発生します。日本と言えば、いまだにフジヤマ、ゲイシャ、サムライ、ハラキリ、・・近年ではアキハバラ（アキバ）、アニメ、オタク・・などがインプットされているようです。私達も諸外国をステレオタイプのイメージで見ているのではないのでしょうか？日本は意識する、しないは別にして、仏教や神道が精神や心理の中に深く流れていることは間違いありません。正月は神社でお参り、葬式は仏教、結婚式はキリスト教式、というも八百万の中の異国の神として受入れる寛容さの現れです。アメリカにはアメリカのフロンティア精神が、ドイツにはドイツの心の精算の問題が、イタリアにはイタリアの重層な文化の流れがあり、その違いが面白いところではないのでしょうか。その違いは学生それぞれに緩やかにあぶり出して頂ければよろしいかと思っています。

**Q.いまだに自分の好きなモノ以外、どう素晴らしいのか良く分からずにいます。芸術やアートとして、凄い！素晴らしい！と誰が言う。あるいは評価されるのは、こういったところからなのかと思います。自分もいつか、ただ分からない物でなく、誰かに良いと言われるような物を作りたいです。**

**Q.宗教的思想や社会批評の入り混じった作品を見ると、やっぱり芸術を志すには、自分の考えや確固たる信念を持っていけないと難しいと思った。**

マルセル・デュシャンによってアートの概念は大きく変革されました。それによって「アート＝美」の概念も拡張されました。辞書の文言は国語学者によって書かれている場合が多く、アートにおける「芸術の定義」の「美」はモダニズム（近代）辺りかそれ以前の芸術を例にとって総称として書かれていると思います。「自由すぎる作品ばかり見てきて、なんだか最近「芸術」がよく分からない」この戸惑いもよく理解できます。芸術の多様性を認め表現の自由を尊重することの素晴らしさを感じましょう。ですからうちの缶詰は美醜を超えたアートと言えます。前人未到の荒野を拓いて「美」も「醜」も越境する作家を祝福しましょう。この授業では次々に知らない作品が登場してきますので混乱や戸惑いも良く理解できます。学ぶほどに謎がうまれるものです。知識をその先へ繋げたいと言う欲求の現れで歓迎すべきもののなのです。疑問がうまれたら独自に調べてみましょう。現代芸術論で学ぶ、ダダから現在までの美術表現は 20 世紀の歴史の中で現されてきました。これは事実であり、このような歴史を一部しか知らされずに日本人のほとんどの人が享受出来なかったのは、日本の美術教育や美術の制度、それを含めた社会制度そのものに何か問題があるかと思います。ファッション、スポーツ、音楽、文学、芸能、社会、政治、経済、事件、事故がリアルタイムにもたらされるのに、なぜ美術は知らされないのでしょうか？デザイナーと言うアート最も近い人々は、アートとデザインが相互に影響を与えていることを学ぶ必要があります。芸術家の脳も皆様の脳もさほど変わりはありません。ただアーティストは表現すべき造形言語をいっぱい蓄えているので作品として表せるのです。皆様も心を全開に開放して森羅万象をインプットする所から始めてください。アウトプットするものが出てくるはずですよ。

**Q.哲学を持って作品が評価を受けるのでしょうか。そこに人を惹き付ける何かを表現できる人が有名になるのですか？**

思考の投影が作品に表れますので、哲学的な思考は作家各々に持っています。哲学を持つことが評価とは結びつきません。哲学と言えど他人の借り物であっては絵に描いた餅と同じで、「**感心はするが感動はしない**」ような作品になるでしょう。自己の思考と表現方法を作ることが肝要です。

「**そこに人を惹き付ける何かを表現できる人が有名になる**」のかも知れませんが。作家は評価や名声を得ることよりも、独自の表現を十全にできることを望んでいます。結果として評価されたり、有名になったりします。

## ・皆さんの感想から（映像作品）

### □フランク・モリス 「フランク・フィルム」 1973 年

「凄かった…。頭の中の情報を一気に叩き込まれたらあんな感じなのかもしれない。展開の仕方も引き込み方も格好良かったあ。独特の雰囲気は嫌いじゃない／フランク・フィルムは圧倒的でしたがあまりにコラージュ素材が多くて目がチカチカしました。イスや動物にしても、多種多様な素材が仕様されていましたが、あれだけの素材をよく集めたなと驚きました／凄い量のコラージュでした。想像の遥か上をゆくコラージュに驚きです／今回のアニメは目がチカチカして疲れました。字幕読むとアニメよく見れないし、逆もまたしかり。もう何回か字幕アリ・ナシで見たいなと思いました。コラージュという事は全部切り抜いて作ったんですね、凄い根気です（全部切り抜いて、並べて1枚1枚フィルムで撮影しています。6年かけて作る根性があるんですね）／コラージュの映像は素材がたくさんあって凄いと思いました。また、コラージュされてる物の動きが面白くて、どうやってるのか気になりました／「フランク・フィルム」凄かった！目が疲れたけどあんなに多くの画像を集め、それで自分の人生を表すとは発想も気力も凄いと思った／今日のアニメーションは少し目に痛かったです。字幕に目がいってしまい、コラージュに集中できなかったのが残念です／「フランク・フィルム」凄い目がチカチカしたけど楽しかったです。コラージュの数もの凄かったです。右縦の文字も言葉のコラージュのように感じました。「人との会話が楽しくなった」でお酒のグラスばかり出るのもいいですね。「この作品は手始めだ」ってかっこいい。

今日のアニメーションのコラージュはとても凄かったです。ナレーションが入る事によってその背景にあるコラージュにも意味が生まれるというか、なぜそこにこのコラージュなのかが分かるようでした。コラージュされた物の量から、6年という年月にも納得がいきました／予想以上の画像の量でびっくりしました。あれだけの量なら5～6年かかるのも無理ないですね。でも1つ1つの画像が本当に一瞬だったので、もっとちゃんと見てみたいなあと思いました／今日の映像は目も耳も疲れました。次から次に情報が入ってくる映像でした。6年かけて作ったコラージュの量が凄かったです。音も説明の他に単語が入っていて、音もコラージュしているみたいでした／フランク・フィルムはわりと取っ付きやすかったです。私は右の方に出る字幕の単語の方が気になりました／フランク・フィルムはフランクのF?だったのかな?つぶやかれる単語。どんどん変わっていくのに合わせてドキドキも早まる感じでした。彼の過去と将来って超個人的な事なのに人を惹き付けるのって凄いと思いました（よく気がつきましたね。縦の字幕（ナレーション）の言葉は「F」で始まる単語が多かったですね。作者の名前「frank」から作品のタイトルも「frank film」とつけています。「F」がこの作品の根幹にあり、「F」語の羅列はまさしく人生の要約、あるいは早送りされた人生のコラージュと言えますよね）。

ほんと数分なのにみただけでどっと疲れました。それは目まぐるしいコラージュのせいでもあったし、少しだるそうな彼の声のせいでも、彼の生きてきた内容の平凡さのせいでもありました。でも、コロコロやりたい事が変わるの悪い事でないのかな、と思いました。いつ興味ややる気が沸くかなんて本人にも分からないのかも知れない。



私も常にやりたい事を選んでやっていけたらなと思いますし、それを邪魔する事は誰もしちゃいけないと思います（このアニメーションが参考となって転機となれるといいですね。どんな巨匠であろうが最初は誰でも未熟者ですよ。確固たる自信など持ちようがありません。先行きの不透明さで不安と悩みばかりです。でも自分が自分を信じてあげて、時には誉めてあげて、励ましながら最後



まで自信を伸ばしていくことが大事なことなのではないでしょうか。今やるべき眼前のことをひとつひとつ丁寧に折り畳む。それが肝要なのです。「フランク・フィルム」は、嘘偽りのない等身大の若者の声と言える作品でしたね。有り余る造形の情熱が異常と思える程に傑出しています。人生と映像が重なることによって強烈なインパクトを見る側に与える。凄いことです。誰でも人生の主演になれるのです。身近なところから探して見ましょう) / コラージュのアニメーションが1973年にすでにあったとは驚いた。現在でもコラージュによるアニメーションはあまり発展してないような気がするので、まだまだ色々な可能性が眠っている分野だと思う (その可能性にチャレンジして楽しませてください。期待しています)。

作品の中にも出てきていたけど、例えばテレビなど、自分自身が見たり使ったりした事のあるテレビは一つじゃなくて、無意識に経験しているものを含めれば膨大な数になると思う。そのような経験を含めて自分の今までを記録するとしたら、コラージュしすぎにも感じた作品は正確な記録に感じた。抽象的なものだけど、もの凄く忠実で具体的な物であるのかなと思った (まさしく時代を映す鏡となっていますね) / 今日の映像を見ていると、作者が今まで見てきたものが生きてきた時代と一緒に体験できた気分になりました。もし自分の半生のコラージュを作ったら、きっと全然違ったものになると思います。面白い自己紹介の道具になりそう / 物凄いスピードで絵が移るのでちゃんと見ている事ができませんでした。ですが、6年かけたというエネルギーが凄く伝わってきて、横字幕と縦字幕、両方あるのが良いと思いました / コラージュ素材のあまりの多さに目がチカチカしてしまいました…。英語のヒアリングで理解できるだけの能力があればもっと楽しめたのですが、字幕と動画を行ったり来たりしながらの視聴だったので目が疲れました。 / 「フランク・フィルム」は一体何枚あるんだ！？というくらい沢山写真や絵が出てきてせわしく面白かったです。自己紹介みたいな物ですよ。こんな自己紹介できたら素敵だなーと思いました。本が沢山出てくる所で、本がひゅーと流れる所が好きでした / とても面白かったです。凄まじい数のコラージュが凄く刺激的でした。語りが二重になってるのも凄く良かったです / 写真の数が物凄くて明滅していく姿はあっという間のこれまでの人生を表しているみたいでした。少し目がちかちかしましたが、組み合わせ方や色合いが綺麗で素敵でした。さすが6年かけたものだなあ / 凄く本能的に生きてる方だなと思いました。色々な事に興味を持ち、その度に夢が変わるけどアニメーションと出会ったのは運命で天命なんだと思いました。

これはコラージュというより、今まで見てきた物の「記憶」に近い気がした。私達は毎日色々な物を見て感じて、脳に記録して、コラージュしていく。つまり記憶のコラージュだなと感じました。これを作った労力は計り知れませんね。凄く面白かったです (記憶のコラージュ、その通りですね。自分の人生そのものを作る作家は大勢います。ここまで赤裸裸に作り込んだ作品は珍しいでしょうね。究極の自己表現は生まれたその日から死ぬまでの顔写真のアニメーションです。誰もやった事がありません。6分程度が良いでしょう) / コラージュ凄かった！スロー再生で見たいなと思ってしまった / 今回の映像は今までで一番好きだ。人生が描かれている。自分も長い時間をかけて作品を作りたい / フランク・モリスの映像は凄いインパクトがありました。ただ、字幕と映像を同時に見るのが凄く難しかったです / 最初に見たアニメーションはあまり画像の多さに目に残像が残りましたが、これだけの画像を集めるのに6~7年かけた彼の粘り強さには尊敬の念を抱きました (大まかなフレームを決めて、集めていたネタごとにストーリーに当てはめて行くのでしょうか。6年間の時間の厚みが人間存在の証明になっている希有なアニメだと思います) / あまりにコラージュが高速で動くので認識するのが大変でしたが、面白かったです / 「フランク・フィルム」は凄く多趣味な人なのだなと思った。あの写真は絵っぽかったですが何の画像なのでしょう (ごめんなさい、何らかの主語をいただかないと返答できません) / 「フランク・フィルム」はとっても可愛い作品だなと思いました。好きな物の実写の画像を集めたり、自伝に基づいた画像をそろえるだけでおしゃれな作品になると思いました。

今日のアニメーション、写真の数と年月が凄かったです。文字に集中しすぎて、後ろの写真たちをじっくり見る事ができなかったです。英語が分かればいいのに…／よく分からなかったです。残念。コラージュ素材をたくさん集めたのも制作に6年かかったのも簡単に真似できないです。その素材を映像にすると一瞬にしかならないのが儚いですね。自分の人生を語ったもの、走馬灯？だから一瞬、一瞬なのでしょう。チカチカの画面と淡々とした語り（英語）横の字幕、眠たくなっちゃいました。でもコラージュはいいなと思いました（人生は一瞬の走馬灯のごとし・・・なのね）／今回の映像のフランク・フィルムは、本当に色々なコラージュがあって、とても綺麗でした。個人的にはコラージュはとても好きです／6年も1つの作品に時間をかけてあれほど多くのコラージュを作って凄いと思いました。結構飽き症っぽかったので、アニメーションとかコラージュは本当の本当に好きな事なのだな、という事が年月を見て分かりました／コラージュの作品（アニメーション）がとても綺麗でした。小さな色や何気ない一枚の写真でも表現の仕方によっては迫力のあるアートになるのだと思いました／アニメーションの「フランク・フィルム」は目まぐるしくて流れる映像に少し酔いそうでしたが、芸術家だけあって本当に色々な事に興味を持ち続けていて忙しい人生だと思ってしまいました。

### ・皆さんの映像作品の質問から

Q. めまぐるしく変わるコラージュの映像をずっと見ていると頭がおかしくなりそうになった。いったい合計で何枚の作品を使ったのだろう。

Q.コラージュ全般に使用する写真の著作権はどうなっているのですか？

コラージュネタの枚数は分かりません？6年分の蓄積の中から、目なら目と同類項のものを集めると意外にもバリエーションをより豊かにする事が



発見ですね。著作権を侵害する程の引用をしていないので問題ないと思います。雑誌や写真の全体を使用せずに部分だけを切り抜いて使用していますので、いわゆる風景と同じような扱いです。建築の写真を撮ってそれを使用しても問題ありませんね。建築の意匠そのものを盗用してさも自分が設計したようにすることを著作権の侵害というのではないのでしょうか？アプロプリエーションの項でも説明をしましたので参照ください。

Q.「フランク・フィルム」は物凄いスピードと情報量で驚きました。自分の人生もこうやって振り返ったら楽しそうだなと感じました。このコラージュに使用した画像はどのように加工しているのでしょうか。PCで作っているのかそれとも手で一枚一枚切っているのでしょうか。

1973年頃のコンピュータは紙テープにパンチングして数式を演算処理していましたので、画像処理が出来るような時代ではありません。1枚一枚切ったコラージュネタを集めては動かして1枚1枚フィルムに撮影した執念と信念の作品です。自己の嘘偽りのない心情の吐露は見る人の人生とも重ね合わせ共振させる作品となって、ある種の感動へと導いていると思います。6年もかけて作り上げる不二の根性を祝福したいですね。